

2016 年 2 月 5 日

神奈川県知事 黒岩祐治 様
鶴岡八幡宮宮司 吉田茂穂 様

DOCOMOMO Japan 代表

松隈 洋



神奈川県立近代美術館（本館・新館・附属屋）と周辺環境の一体的保存に関する要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20 世紀の建築と環境遺産の価値を認め、その保存を提唱することを目的の一つとする、国際的な非政府組織 DOCOMOMO (Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement=モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織) の日本支部です。

神奈川県立近代美術館については、1998 年に日本建築学会の歴史意匠委員会に設けられた DOCOMOMO 対応ワーキング・グループによって、1999 年に「日本を代表する近代建築 20 選」の一つとして選定し、DOCOMOMO 本部を通じて世界へと伝えられました。また、それを記念して 2000 年に開催された展覧会「文化遺産としてのモダニズム建築—DOCOMOMO20 選」展は、神奈川県立近代美術館と実行委員会との共催により、本館 1 階と新館が展示会場となりました。同じ 2000 年に国際組織の日本支部として正式に承認されて発足した本会にとって、神奈川県立近代美術館は、活動の出発点となる象徴的な建築でもあります。しかし、その当時から存続の危機が繰り返し伝えられていましたので、その行方にも継続的に注視してきました。

そんな経緯もあり、本会からは、すでに、別紙の通り、2014 年 2 月 21 日付で、神奈川県知事宛に、「神奈川県立近代美術館の保存・活用要望書」を提出させていただいております。その後、神奈川県教育委員会は、2014 年 8 月から耐震調査を実施し、その結果を受けて、2015 年 9 月に、1951 年に竣工した神奈川県立近代美術館の「本館」については、耐震改修を施した上で存続させる方針が打ち出されました。この見識ある決定に本会も深く敬意を表します。けれども、その一方で、同じく坂倉準三の設計によって 1966 年に建設された「新館」と「附属屋」（1969 年に両端に学芸員室と雑品庫が増築された）については、いずれも取り壊して撤去する計画であることが発表されました。そして、この度、借地権期限の満了にともなう鶴岡八幡宮への土地の返還を機に、2016 年 1 月 31 日をもって神奈川県立近代美術館としての 65 年にわたる美術館活動を休止し、閉館されるに至りました。

こうした歴史を踏まえた上で、本会は、改めて、次のことをお願いする次第です。

1. 保存活用が決定している「本館」ひとつを単体として残すのではなく、周辺も含めた一体的な環境の全体性を、良好な形で継続できる方法を検討していただきたいこと。
2. そのことを実現する上で欠かすことのできない重要な価値を持つものとして、取り壊しの方針が出されている「新館」と「附属屋」についても、その保存活用の可能性について、再度検討していただきたいこと。

この時点において、以上のような 2 点を改めてお願いする背景には、神奈川県立近代美術館の「本館」だけではなく、「新館」と「附属屋」を含めた全体が一体となって創り出してきた環境造形の歴史的な意味と価値が、近年、急速に共有されてきたことがあります。

戦後間もない厳しい時代状況の下、当時の内山岩太郎神奈川県知事の高い見識と鎌倉在住の文化人たちの尽力、鶴岡八幡宮の借地の無償提供によって1951年に竣工した「本館」は、そうした敗戦後の時代精神を見事に結実させた日本で最初の公立の近代美術館として誕生し、戦後文化史に欠かすことのできない存在として現在までの歴史を積み重ねてきました。同時に、竣工当時の厳しい経済状況もあって最小限の施設規模であったがために、当初から機能の充実のための増築が検討されていました。こうして、本館の竣工から15年の時を経た1966年に、当時の館長だった土方定一の希望と、設計者である坂倉準三の考えの一致から、「自然の真ただ中で美術を鑑賞できる展示空間」*1という方針によって、「新館」と「附属屋」が増築されたのです。

そして、この増築にあたって掲げられたのは、「本館、池、八幡宮の境内を構成する樹木を出来る丈そこなうことなく、新たに出来る建物がそれ等の群として調和し更に現在の環境をより良くするものでなければならない」、そして、「三つの建物が出来ることによって池から八幡宮の森迄の連続感がそこなわれることがあってはならない」という設計方針*2でした。このような考えの下、「本館」と「新館」の間には、南側の平家池の水面を深く引き込んで拡張させ、二つの建物の間から北側の森へと自然の風景を連続させる工夫が施されました。このことによって、手前の平家池側から見ると、水面が「本館」と「新館」の間に深くくい込み、背後の森へと視覚的につながる新しい風景が生まれました。また、「新館」東側の参道との間には、樹木を増殖することによって、参道の雰囲気損わない考慮も施されました。一方、「附属屋」は、北側の背後の森へと視覚的な連続性を保ち、「本館」と「新館」の背景として寡黙な表情を醸し出すものとして、低層で開口部の少ない建物にまとめられました。さらに、「新館」は、「本館」の閉じた展示室に対して、ガラス面を用いて環境へと大きく開いた空間性を創り出し、大壁造の本館と対比的に柱梁を露出させた真壁造としつつ、高さや外壁の位置もあえて「本館」とは揃えないことによって、「本館」の存在をより際立たせる役割も演じています。

このような方法から、3つの建物による群としての造形は、その間に広がる外部空間も含めて、単体の「本館」だけでは成し遂げることのできなかった全く新しい環境美を生み出したのです。そして、それは、坂倉準三が、師のル・コルビュジエに学んだ近代建築の方法を拡張し、桂離宮を代表される日本の伝統的な建築や庭園に見られる、内外空間の融合による環境造形という特質を取り込むことによって実現した日本近代建築の卓越した達成でもありました。神奈川県立近代美術館の建築的な価値は、このような3つの建物のアンサンブルとして世界的にも評価を受けてきたのだと思います。「本館」と「新館」、「附属屋」が一体としての価値を持つことは、例えば、フランスの代表的な百科事典であるラ・ルース (Larousse) にも、坂倉準三の記述の中で、代表作品として、「le musée d' Art moderne de Kamakura (1951 et 1966)」と表記されていることから明らかです。

先ごろ終了した美術館活動の歴史を3期構成で紹介する最後の展覧会「鎌倉からはじまった」展 (2015年4月11日～2016年1月31日) に、本当にたくさんの人々が訪れ、NHKの日曜美術館で特集されて大きな反響を呼んだのも、おそらく、以上のような意味が広く伝わって共有されたことがその要因になっていると思います。さらに、近年では、DOCOMOMO International の会長や ICOMOS20 世紀委員会の委員長らも見学に訪れており、世界的な評価は高まるばかりです。というのも、美術館建築の実現を長い間待ち望んでいたル・コルビュジエよりも先に、その構想と重なる建築思想によって坂倉が実現させた美術館であること、東京上野の国立西洋美術館の敷地視察に來日した際、1955年11月8日に坂倉の案内で見学に訪れたル・コルビュジエが影響を受けたことを、設計担当者の駒田知彦が証言を残しているからです*3。その意味で、神奈川県立近代美術館は、すでに重要文化財となった国立西洋美術館 (1959年) と不可分の建築として同等、あるいはそれ以上の価値を有し、世界に誇れる貴重な文化遺産なのだと私たちは考えます。上記の目標を実現するために越えなければな

らない課題が多いことは十分に理解しております。しかし、そのかけがえのない価値が広く共有されつつある中で、先人たちが守り育ててきたこの美術館が、新たなる第2ステージへ、その近代美術館としての輝かしい歴史を踏まえながら、より良い形で継続することが、今こそ求められています。また、その行方に、日本のみならず、世界の建築関係者も注目していることも忘れてはいけないと思います。

以上のことをご理解いただきまして、その一体的な環境の全体性を保存できる道筋をご検討いただきたいと願っております。ここに改めてお願いする次第です。

尚、本会は、この建築と環境の保存に関して、学術的な協力を可能な限りさせていただく所存です。

敬具

■註

*1. 日本建築家協会編『DA 建築図集 美術館』彰国社 1982 年

*2. 戸尾任宏「神奈川県立鎌倉近代美術館増築計画」『近代建築』1965 年 10 月号

*3. 座談会「「幸福な建築」神奈川県立近代美術館その誕生とこれから」『建築ジャーナル』1994 年 6 月号